

胡適

「文学進化の觀念と演劇改良」解説

「文学進化の觀念と演劇改良」（文学進化觀念と戯劇改良）は、胡適が『新青年』五卷四号（1918年10月）に発表した評論である。「イブセン主義」と並んで、五四新文化運動の演劇面を代表する評論である。作者の胡適については、「イブセン主義」解説を参照されたい。

この評論が掲載された『新青年』五卷四号は「演劇改良特集」（戯劇改良専号）であった。この特集は胡適「文学進化の觀念と演劇改良」、傅斯年「演劇改良各面觀」、傅斯年「演劇改良再論」、宋春舫「近世名戲百種目」からなり、更に歐陽予倩「私の演劇改良觀」、張厚載「私の中国旧劇觀」の二編を付録として収めていた。イブセン特集から四ヶ月たった。

『新青年』の全号を通じて芸術文化問題で特集が組まれたのは、イブセン特集と演劇改良特集の二つしかない。演劇改良特集号の重さを知ることが出来る。

特集の中心は胡適、傅斯年の論文であり、共に激しく旧劇（伝統演劇）を批判している。彼らの中国伝統演劇批判の根拠は、「一つの時代にはその時代の文学がある」（「文学進化の觀念と演劇改良」）という文学進化論であり、それを演劇にも適用した。彼らは、イブセンを代表とする西洋近代劇を今日の演劇とみなし、それに基づき、中国伝統演劇を形式・内容の両面から強く批判したのである。

胡適・傅斯年は、まず京劇など中国伝統演劇の特徴である歌唱、台歩、立ち回り、臉譜など今日では中国伝統演劇の貴重な特色と考えられている種々の技法をを全面否定した。「様々な『遺形物』を取り除き、西洋のここ百年で発展し続けてきた新たな概念、新たな方法、新たな形式を採用すれば、中国演劇にも改良進歩の希望が持てるのである」（「文学進化の觀念と演劇改良」）

彼らは、さらに伝統演劇の内容についても激しい批判を行った。中国伝統演劇の内容は中国の後進性と密接不可分に結びついている、というのである。

「中国文学に最も欠けているのが悲劇の觀念である。（中略）このような（伝統演劇に表現された一引用者）『団圓迷信』は、中国人の思想が薄弱である確かな証拠

である。」（胡適「文学進化の觀念と演劇改良」）

団圓とは、本来は劇の最後に登場人物が一堂に会することであり、伝統演劇には牽強付会なハッピーエンドで終わらせるものが多かった。このような団圓は、封建制の矛盾と対決することを避け、それに屈服したものと、胡適らは考えた。そして伝統演劇を打倒しないことには中国社会の真の革命はかちとれないと考えたのであった。伝統演劇は封建的要素を持つがゆえに、ことごとく否定された。

今日の立場からすれば、『新青年』の伝統演劇全面否定が多く偏りを持っていたことは明らかである。胡適・傅斯年自身もまもなく古典主義者に変身し、しかも彼らは1920年代に入った後、『新青年』演劇改良特集号についてほとんど言及しなくなった。「文学改良芻議」など文学革命一般については、胡適は繰り返し語っているとは対照的である。『新青年』演劇改良特集号の内容に対する胡適らの屈折した自己評価が伺える。

しかし、現代の伝統演劇再評価は、あくまで『新青年』のような演劇観を経たうえで到達できた視点である。現代演劇の草創期にあつては、自らの純粋な姿を確立するため、まず伝統演劇の影響を切り捨てる必要があつたのである。その意味で、『新青年』の演劇論は今日からみて不十分な面が多々あると、その出現は中国演劇史のうえで不可欠であり必然でもあつた。

ここに訳出した「イブセン主義」「文学進化の觀念と演劇改良」は、いずれも『新青年』初出テキストを底本とした。新文化運動期に実際に読まれ影響を与えたのは、このテキストだからである。「イブセン主義」「文学進化の觀念と演劇改良」とも、その内容は早くから日本で紹介されていたが、日本語に翻訳されたのはこれが初めてである。これによって、中国語を解しない日本の演劇研究者・愛好者も、五四新文化運動の演劇面の内容をある程度全面的に知ることが可能になった。今回の翻訳が日中の文化・学術交流をいっそう促進するものになることを願ってやまない。

（瀬戸宏）